

## 11 天国のダイナ

(『至上の伴侶』)

ダイナは自分が死んだとは知らず  
死の苦しみが終わると  
黄金の床に座って  
ご主人さまの足音を心待ちにしていた

耳をぴんと立て 気遣わしげな眼をして 5  
ときにはそわそわ ときにはがっかり  
天国へは四つ足は行けないとは  
つゆ知らずに

光輪 豎琴 <sup>つばさ</sup>翼つけた天使たちが  
集まって ダイナをたしなめ 10  
天国の掟を語って聞かせたが  
ダイナは動こうとはしなかった

天国への入り口に至る階段を踏む  
たった一つの足音  
その音を聞くまでは 自分の務めは 15  
ここで待つことだと必死に弁明した

ダイナは耳を寝かせ弁明した  
口を開け 白い歯を剥き  
自分の真心を証明してくれる  
天使イスーリエルの槍に訴えた 20

突如 不安げな魂が昇ってくる  
はるか下方の死者の橋より  
群がる天使に囲まれながら その音を聞きつけた  
ダイナにはご主人さまだと分かったのだ

困り果てた天使たちをしり目に  
ダイナは確信したのだ あれはご主人さまだと  
キャヒーンと鳴くが早いか  
ダイナは鏡のごとくおさまった海を飛んで渡った

止めようとする智天使たちを蹴散らして  
駆けつつも不<sup>ぶ</sup>様<sup>さま</sup>にまろび  
ダイナは聖ペテロの座の下に逃げ込み  
ご主人さまを待ち受けた

ひとつの霊が 群集のなかから叫んだ  
「この中に居ぬか  
愚か者を酒毒より救いしものは  
卑怯者を恐怖から救いしものは

何をやってもその甲斐無かったのに  
魂を暗闇から白昼に戻し  
絶望から救い出し  
ろくでなしを真人間に戻してくれたものは」

「こちらに来て探してみよ」と聖ペテロは言い  
天国の門を細目に開けた  
「わたしに女と男についてのいささかの知識があるならば  
その女はきっとこの近くにいるはずだ」

「徳でも 言葉でも 技でもなく  
神の恩寵を受くる望みでもなく  
罪科<sup>つみとが</sup>とも神とも無縁のもの  
その心根純なるもの

「美しさでも 信仰でもなく  
清純潔白なる行いでもない  
言ってみれば泥棒のようなもので  
何より私と一心同体のもの」

「こちらに来て探してみよ」と聖ペテロは言った

「うまく行くと良いが

それにしても女と男につきいささかの知識はあったつもりだが 55

お前の謎めいた言いぐさは測りかねる」

その瞬間 ダイナは聖ペテロの座の下から飛び出し

ご主人さまの両腕の中に飛び込み

顎から髪まで顔中をなめまわした

そして聖ペテロはふたりを天国に迎え入れた 60

(榊井幹生訳)